

萩原朔太郎記念館が広瀬川河畔に建つまで

書斎

1960(昭和35)年11月、当時の建物所有者関口林五郎さんからの寄附を受け、前橋市が、桃井小学校の校庭北東隅に移築し、翌年5月15日に一般公開されました。

離れ座敷

1968(昭和43)年8月、生家所有者代表の津久井幸子さんからの寄附(建物一棟と庭園の一部)を受け、前橋市が臨江閣敷地内北西部に移築し、1969(昭和44)年3月30日に一般公開されました。

土蔵

朔太郎生家は、旧前三百貨店が津久井家から譲り受け、1968(昭和43)年12月に撤去が行われましたが、土蔵はしばらくそのまま存在していました。1972(昭和47)年9月に旧前三百貨店からの寄附を受け、前橋市は、書斎・離れ座敷も一か所に集めた「萩原朔太郎記念館」構想のもとに、土蔵を1974(昭和49)年7月30日に敷島公園に移築し、展示施設として1975(昭和50)年4月1日に一般公開しました。

萩原朔太郎記念館開館

その後、書斎は1978(昭和53)年11月30日に、離れ座敷は1979(昭和54)年12月20日に、それぞれ敷島公園への移築復元を完了し、1980(昭和55)年5月11日から記念館として公開しました。

広瀬川河畔への移転

前橋文学館周辺を萩原朔太郎の拠点とするため、前橋文学館と広瀬川を挟んだ河畔緑地(市営パーク城東北側)に萩原朔太郎記念館(土蔵、書斎、離れ座敷)を移築復元し、2017(平成29)年4月8日から新たに公開しました。

北曲輪町の萩原家

■萩原朔太郎記念館(書斎、離れ座敷、土蔵) 移築復元しています



萩原朔太郎の生家は、前橋市北曲輪町69番地(現・千代田町二丁目1番17号)にありました。父密蔵は名医として信望篤く、一時期は患者に整理札を出すほどであったといわれます。しかし、1919(大正8)年10月、密蔵が老齢により開業医をやめたため、萩原家は石川町28番地(現・紅雲町二丁目)に移りました。このとき北曲輪町の家は、津久井惣治郎・幸子夫妻が入り「津久井医院」を開業し、実質的に津久井家が萩原医院の後を受け継いだ形になりました。



萩原朔太郎

詩人

1886(明治19)年11月1日、前橋生まれ。従兄である萩原栄次から短歌の手ほどきを受け、文学の道に入る。後に詩に転じ、1917(大正6)年に第一詩集『月に吠える』を刊行。口語の緊迫したリズムで、感情の奥底を鮮烈なイメージとして表現し、後の詩壇に大きな影響を与えた。さらに、1923(大正12)年に出版した『青猫』で、口語自由詩の確立者として不動の地位を得る。1942(昭和17)年5月11日、肺炎のため死去。享年55歳。



萩原朔太郎記念館

■ 利用案内

● 開館時間/午前9時～午後5時 ● 休館日/水曜日・年末年始 ● 入館料/無料

■ 所在地

前橋市城東町一丁目2番19号

■ 連絡先

水と緑と詩のまち 前橋文学館
〒371-0022 前橋市千代田町三丁目 12-10
TEL.027-235-8011 FAX.027-235-8512



萩原朔太郎記念館

SAKURATA



書齋

書齋使用当時の朔太郎

この書齋は生家の裏庭にあったもので、元来は味噌蔵として使われていましたが、1913(大正2)年10月に工事を始め、約4か月を要して書齋に改造したものです。内部はすべてセセッション式(西洋の建築・美術・工芸上の一様式)に統一され、装飾や家具類の様式は、当時の前橋としては極めて先端的なものでした。これは朔太郎自身の考案によって整えられたものです。

朔太郎がこの書齋を使ったのは、1914(大正3)年1月末から1919(大正8)年10月下旬までのおよそ5年10か月で、27歳から32歳の時期に当たります。朔太郎は、第一詩集『月に吠える』や、第二詩集『青猫』中の、多くの作品をこの書齋で残したことになります。

ここに入出入りする人たちによって、のちに「ゴンドラ洋楽会」から「上毛マンドリン倶楽部」となる朔太郎主宰の音楽グループが形成されます。この部屋は音楽室とも呼ばれ、朔太郎はここで集会をしたり、演奏会を開いたりしました。この部屋には、室生犀星や北原白秋らが訪れ、朔太郎と語り合ったといわれています。



朔太郎が創作に動んだ机と椅子(レプリカ)



離れ座敷

朔太郎と離れ座敷

離れ座敷は、母屋と接続する渡り廊下で結ばれた純和室で、八畳の部屋と床の間を配し、円窓のある部分には違い棚があります。母屋からの渡り廊下の近いところには水屋があって、全体が萩原家の客室としての造りになっています。この部屋から築山をあしらった立派な庭園が眺められ、池が造られていたといわれています。

この建物は、1892(明治25)年頃、朔太郎の父密蔵が建てたもので、主に来客の接待に萩原家が使っていたものといえます。朔太郎の妹・津久井幸子の回想によると「あの部屋は私の生まれる前のことでよく知りませんが、父や母がお茶に興味をもっていたので茶室風につくったものではないかと思います。子どものころ病気などになりますと、よくあの部屋にねかされました。兄もそうだったと思います。兄があの部屋で『恋愛名歌集』を書いていたのを覚えています。」ということです。

朔太郎が生家に住んでいたころ、北原白秋、若山牧水、室生犀星などが訪れ、この部屋に通されたといわれています。北原白秋は1915(大正4)年1月の約一週間、萩原家に滞在しています。白秋の妹北原家子にあてた朔太郎の手紙に「一同お陰さまにて近來になき面白き正月を過したりとて大よろこびに御座候。母より御宅さま御一同によろしく兄上さま御滞留中不行届の段幾重にも御用捨て下され度との伝言に候」とあり、白秋は、萩原家の人たちにも好印象を与えたことが読み取れます。



円窓が配された和室



土蔵

朔太郎の資料を戦火から守った土蔵

萩原家の土蔵は、離れ座敷から庭を望む左手にあって、全体の敷地からすると南東の隅に位置していました。このため、表通りからもはっきり見えました。この建物は、1894(明治27)年に生まれた朔太郎の妹・津久井幸子が、「あの土蔵は私が7歳か8歳のころに建てられたと思います。夏の時分だと思いますが、上棟式があって職人さんが高いところに登ってお餅をまいたのを覚えています。」と回想していることから、1901(明治34)年または翌年に建てられたものと思われます。また、鬼瓦の下の「萩」の文字が萩原家の所有を物語っています。この土蔵は、萩原家の守り神とも言えるもので、火災による延焼をいくたびかくい止めたことがあります。

ことに前橋市は1945(昭和20)年8月5日の空襲で市街地の8割を失いました。市の中心部にあった萩原家の一帯も焦土と化し、すぐ東の隣家も罹災しましたが、朔太郎生家は土蔵により戦火を免れたといわれています。土蔵に保存されていたノートや原稿、朔太郎あて書簡をはじめとする数多くの朔太郎資料が今日に伝えられているのも、まさにこの建物の功績といえましょう。



上) 鬼瓦の下の「萩」の文字
左) 詩集『月に吠える』『青猫』